

卒業研究における概念分析の適用可能性と教育的効果

大森 純子

保健学科 看護学専攻 公衆衛生看護学分野

Applicability of Concept Analysis in Graduate Studies and Its Educational Effect

Junko OMORI

Public Health Nursing, School of Nursing, Division of Health Science, Graduate School of Medicine, Tohoku University

Key words : graduate study, concept analysis, educational effect

In order to promote the development of nursing science, I discuss the applicability of concept analysis in graduate studies and its educational effect in the University's School of Nursing, Health Science Division, in relation to the Faculty of Education and the Graduate School of Education.

By conducting the analysis with undergraduate students using 12 steps in seminar style, the development effectiveness of 10 qualities of nursing researchers was identified through the concept analysis process. The results provide useful suggestions for discussing the awareness of nursing phenomena and conceptualization in order to design educational programs based on research attitudes in undergraduate and graduate education.

I. はじめに

看護学は、臨床・臨地における患者・家族や住民のQOL（生活の質・命の質・人生の質）にかかわる事象に焦点をあてる実践科学である。看護学の学問としての継続的発展のためには、大学教育を保健師・助産師・看護師を養成する場と捉える視点から脱却し、看護学の研究者を育成するための基礎教育として捉え直し、学部教育と大学院教育をどのように連動させるか検討することが課題である。

東北大学は、「研究第一」「門戸開放」の理念を掲げ、世界最高水準の研究・教育を創造することを使命とし、研究の成果を社会が直面する諸問題の解決に役立て、指導的人材を育成することによって、平和で公正な人類社会の実現に貢献する

ことをめざしている。本稿では、この理念のもと、保健学科設置後10年を経過した医学部保健学科看護学専攻において、学生が卒業研究に取り組むプロセスを通して、どのような能力を修得することが望ましいか検討したい。

平成26年1月に新設された公衆衛生看護学分野では、初年度の卒業研究に概念分析を取り入れた。今回の検討は、学部学生3人の興味や関心をもとに、特定の概念を探究する研究として取り組めるよう工夫した概念分析のゼミナールの内容と、そのプロセスを通じて得られた教育的効果に関する考察である。

なお、概念分析の手法には、文献上の記述を概念に関するデータとして扱うRodgers¹⁾のアプローチを用いた。なお、学部4年生にとってはじめての研究的な取り組みであること、7セメス

ターでは臨床実習が断続的にあること、概念に関する哲学的理解や抽象的思考の習得に時間を要することを考慮し、文献検索サイトは医学中央雑誌に限定した。サンプル文献は和文献が中心となったが、ランドマークの文献や関連資料等は英文献・WEB サイトも含めた。

II. 概念とは

1. 現象の意識化, 概念化, 理論化

概念とは、我々が目にしているものやことをさす言葉とその意味内容である。看護の場において、何が起きているか、何が行われているか、何と何がどのように関係しているか、気になる現象に目を向け、その詳細を語り、説明できるようになりたいと思うことがある。このような経験を意識化し、言葉を用いて説明しようとする。このことが概念に関心を寄せるということである。研究的には、概念とは理論を構成する要素である。概念と概念の関係を説明するものが理論である。

概念化は、看護現象の理論化をめざすために不可欠である。研究の第一段階として概念化に着手することは必須である。その研究の発展において、妥当性と信頼性を担保することができる重要な手段でもある。研究の第一段階で明らかになった概念に基づき、概念の構成要素を変数に置き換え、変数間の関連や、因果関係を検討することも可能となる。意識化、概念化、理論化と研究を進めていくことにより、介入研究をデザインし、その変化をもって介入効果を評価することもできる。人々の苦悩とともに身を置き、人々との相互作用のなかに安寧を創出する看護においては、医学、心理学、社会学、教育学などの関連学問領域の広範囲理論の適用だけでは限界がある。新しい実践科学である看護学においては、現象の観察や記述に基づき、その概念を探究することから研究が段階的に発展することに意味がある。

2. Rodgers の概念の捉え方

看護学における概念分析の手法は、現象主義(essentialism)の流れを汲む理論的基盤をもとに、看護独自の現象の理論化や研究枠組みを明確にす

る目的で1980年代より開発されている²⁾。Rodgers は、言葉の性質に注目する属性理論(Dispositional Theories)の哲学の考え方を基盤に、その言葉が現時点の知見の集積の状況として、実際にどのように活用されているか、文献検索と文献検討から導き出すアプローチを提唱した^{1,2)}。近代哲学に立脚したRodgersの概念分析では、概念はダイナミック、ファジー、文脈に依存しているものとされる³⁾。概念とは普遍的で動かしがたいものとする伝統的な考え方とは異なり、革新的な視点ともいわれる。

看護に関連する現象には、社会文化的な文脈があり、時代とともに使う人や場(領域)によって変化し、実践と研究の連動の中で開発されていく必然性がある。Rodgersの考え方の特徴は、概念は時間の経過とともに開発されるものであるところにある。適用され、活用われ、重要性が増すとといった円環的なサイクルを経て発展していく実存として概念を捉える考え方である³⁾。それぞれの社会文化的文脈を重んじ、時代の変化とともに発展すべき看護学の研究の第一段階に、この考え方と概念分析を取り入れることに意義を見出すことができる。わが国の先駆的な看護学の大学院教育では、妥当で信頼性の高い研究を計画するために、Rodgersの手法が用いられている。

III. 概念分析の方法

Rodgersの概念分析³⁾は、サンプル文献から概念に関する記述をデータとしてコーディング・シートに記載し、概念の特徴(属性、先行因子、帰結など)について、意味内容によるカテゴリを組みながら分析を進める。サンプル文献とは、作業上の暫定的定義をもとにその概念の特徴が示されている文献である。サンプル文献の数は、1つの領域において最低30文献とされる。検索された文献数が多い場合はそれを母集団と捉え、少なくとも母集団の20%を無作為抽出してサンプル文献とする。サンプル文献の他にも、ランドマークとなる文献や関連資料、辞典や事典等も読むことになる。

1. 12段階の手順設定（表1）

今回は、卒業研究として取り組むため、学部学生にも理解できるように、概念を分析する手順として、以下に示す12の段階を設定した。全体を通して、時間と共に変化する概念を分析するため、概念が生まれ、変化してきた契機や経緯、今後どのように変化する可能性があるか、看護の発展においてどのように活用し変化させる必要があるか検討した。実際に、今回設定した12段階を踏んだ月ごとの進度を表1に示す。

- (1) 関心を寄せる概念を明確にする。
- (2) 概念分析を行う概念を特定する。
- (3) どのような領域の文献からデータ収集する

- るか、適切な領域を検討する。
- (4) 文献検索を行い、データ収集の対象となるサンプル文献を入手する。
- (5) サンプル文献からデータ収集を行うためのコーディング・シートを作成する。
- (6) サンプル文献からデータを収集し、コーディング・シートに記載する。
- (7) 概念の特徴について、既存の定義、代用語、関連概念などと合わせて検討する。
- (8) データの意味内容に基づき、カテゴリを検討する。
- (9) カテゴリ間の関係性について検討する。
- (10) 概念の特徴についてカテゴリを用いて図示する。

表1. 卒業研究における概念分析の進捗 [期間：2014年1月～12月]

概念分析の手順	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
(1) 関心を寄せる概念を明確にする。	■											
(2) 概念分析を行う概念を特定する。		■										
(3) どのような領域の文献からデータ収集するか、適切な領域を検討する。			■									
(4) 文献検索を行い、データ収集の対象となるサンプル文献を入手する。				■								
(5) サンプル文献からデータ収集を行うためのコーディング・シートを作成する。					■							
(6) サンプル文献からデータを収集し、コーディング・シートに記載する。						■						
(7) 概念の特徴について、既存の定義、代用語、関連概念などと合わせて検討する。							■					
(8) データの意味内容に基づき、カテゴリを検討する。									■			
(9) カテゴリ間の関係性について検討する。										■		
(10) 概念の特徴についてカテゴリを用いて図示する。											■	
(11) 分析の結果から、概念の定義を案出する。												■
(12) 概念の典型的な例として、モデルケースを記述する。												■

- (11) 分析の結果から、概念の定義を案出する。
- (12) 概念の典型的な例として、モデルケースを記述する。

教員は、学生概念分析の手法の理解を促すため、臨床看護師向けの雑誌に連載された概念分析の紹介記事や、既存の概念分析の和文献を例示し、今回のために考案した12段階の手順に沿って指導した。

学生は、抽象的思考を習得するために、既存の概念分析の和文献をできるだけ多く入手し、最終成果物をイメージしながら分析に着手した。自分たちで入手した概念分析の文献を参考に、概念の特徴について理解を深めていた。カテゴリ生成や概念図の作成、定義やモデルケースの考案、論文の記述についても随時参考にしていた。

2. ゼミナールの形式

実習期間以外は、隔週（月2回）、10月11月の分析の段階では毎週、1回2時間から3時間かけてゼミナールを行った。個人の成果を持ち寄り、最初に現時点で困っていること、メンバーに相談したいことを伝え、進捗状況の報告と進め方について意見交換を行った。3人の卒業研究のテーマ、文献検索式、サンプル文献数を表2に示す。

教員は、学生それぞれの理解度をアセスメントし、3人の進度を合わせるように、ゼミナールの時間内にフォローアップした。互いの状況を確認しあうことにより、手法的な理解を促すよう、方法的指導もその場で共有できるように行った。次回までの作業を明確に指示し、予測される問題への対応方法を確認し、その場で個々人の長所と課題を伝えるようにした。

学生は、ゼミナールの回を重ねるうちに、他者

が分析している概念にも精通し、自分の意見として分析方法やカテゴリ等の代替案を出すようになっていった。概念図を作成する段階になると、3人それぞれの当初の研究の動機や課題意識に照らし、どのサンプル論文のどのデータからそれが示せるか、考察の切り口はどうあるべきかなど、妥当な分析の方向性や概念を分析する意義を共有しながら、概念に関する思考の深まりを促し合っていた。

IV. 教育的効果

卒業研究として概念分析に取り組んだ学生3人の学びの振り返り（リフレクション）の内容から、教育的効果を抽出した。このリフレクションは、卒業研究終了後、論文を提出した後にゼミナールの最終回として行った。

リフレクションの内容から、10の看護学研究者としての資質開発を示す意味内容（カテゴリ）が抽出された（表3）。この10の資質開発は、概念分析の進捗と共に①から⑩へと段階的に開発されていた。自分が関心を寄せる看護現象を意識

表3. 概念分析の取り組みを通じた看護学研究者としての資質開発

①	自らの経験に基づき事象の理解を深める
②	看護学の独自領域に気づき立ち位置を固める
③	既存の知見を踏まえて思考を発展させる
④	研究の問いと分析の問いを磨く探究心を醸成する
⑤	自身の研究として真摯に分析に専心する
⑥	自身の研究の独自性と意義を見出す
⑦	自身の力で初志貫徹した達成感と自信を得る
⑧	新たな研究課題と将来の展望を見据える
⑨	意見交換や成果を公表することを価値づける
⑩	現時点の等身大の看護観を確立する

表2. 卒業研究のタイトル、検索キーワードと検索式、サンプル文献数

タイトル	検索キーワードと検索式	サンプル文献数
地域移行期における「退院支援」の概念分析	(退院支援/TI and 移行/TI) and 原著論文	50件
地域・職域連携：概念分析	(地域/TI and 職域/TI and 連携/TI) and PT (会議録除く)	44件
一次予防における「環境」の概念分析	(一次予防/TA and 環境/TA) and PT (会議録除く)	31件

化し、概念化に至るまでのプロセスにおいて、看護学研究者の倫理的基盤となる信念や態度、データに真摯に向きあう姿勢、自分の研究として新たな知見を創出できた達成感や自信など、研究能力を自ら開発するために有用な資質が会得されていた。

以下に、①から⑩のカテゴリを用いて、概念分析の手順と進度、ならびに資質開発の関係を記述し、リフレクションにおける表徴的な語りの一部を斜体で提示する。

学生は、概念分析に着手した当初には、自分が関心を寄せる概念を意識化しようと、①自らの経験に基づき事象の理解を深め、②看護学の独自領域に気づき自分の立ち位置を固めていた。データに基づき概念の特徴について検討を重ねるなかで、③既存の知見を踏まえて思考を発展させ、④研究の問いと分析の問いを磨く探究心を醸成していた。⑤自身の研究として真摯に分析に専心しながら、⑥自身の研究の独自性と意義を見出し、⑦自身の力で初志貫徹した達成感と自信を得ていた。同級生と段階的に成果を共有して進むことにより、⑧意見交換や成果を公表することを価値づけるようになった。さらに、卒業論文としてまとめあげる頃には、それぞれが⑨新たな研究課題と将来の展望を見据え、⑩現時点での自身の等身大の看護観を確立していた。

実習で見学に入った、患者や家族も同席しているのに本人たちの意向が入らない退院調整会議に疑問を感じ、「“退院支援”っていったい何なんだろう」と思った。だから、論文ひとつひとつ読むのも楽しかった。同じ退院支援でも、与えられた関連テーマの一部だとしたら、ここまでは思えなかった。臨床に出たら、患者や家族を中心とした“退院支援”を充実させるために、自分の役割として何ができるか考えたい。

仕事中心の生活で自分が住む地域に馴染みがない保健師が「退職後の自分が心配」とつぶやいていたことがずっと気になっていた。どんな言葉があるのか、キーワード探しをしていたら、“地域職域連携”に出会った。

「これだ」と思った。論文を読むのは苦手だったけれど、興味があることばかりで、データから新しい発見がいっぱいあって視野が広がり、最後まで新鮮さが続いた。一定の視点でブレないで論文を読めるようになった。その途中で就職活動もあったので、職域との連携ができそうな地域を選んだ。

身近な人が病気になった経験から一次予防としての“環境”が大事だと思った。だから、「病気ごとに予防策があるはずだ」と自分で決めつけてしまい、頭が固まったことがあった。ゼミのみんなと話をして、そういうふうに一予防全体として捉え直せばいいんだと見えてきて、新たな発見があり、まとめることができた。自分の思いが具体化できて、自分に自信がもてるようになった。

—— 中略 ——

今までの看護の勉強は、教わった思考過程をピピッと素早く正しくみたいところがあって、教えられたことに何の疑問ももたず、何故なんだろうと考えもしなかった。でも、根拠に基づいていれば、学生でも自分の考えを示せること、それが認められることがわかった。

自由な発想でよいと言われ、すごく嬉しかった。今までそういうことが許されなかったから、どこまで本当に自由なのか、自由の範囲はどこまでか探ったりして、最初は戸惑った。看護は正しい答えがあることばかりだと思っていたから、自分で答えを見つけることは、初めての希望のような経験だった。将来も自由に考え、何かに縛られない働きができればいいなって思うようになった。

概念分析を通して、概念も自分もちょっと成長できたかな。自分が最初から生み出してきたことを最後まで育てきた達成感がある。ゼミでは、自分の研究はこうだって言える強い信念が育てきた感じ。迷った時に「こういうことを目指してこの研究やっているんじゃないの」と言ってもらえた。この概念の代表者っていうか、関心テーマの全体を把握できているから、(ゼミは)有識者会議みたいだった。いつもならこういうのは眠くなるけど、眠くならなかった。人のプレゼンでも、何でも自分のテーマに結び付けて考えることができるようになった。自分で自分の畑を耕すみたいなの。

V. おわりに

わが国では、概念分析は一部の大学院教育において取り入れられている段階である。博士課程のコアカリキュラムにおいて、哲学的基盤と分析の手法を洋書のテキストを用いて学び、個人の課題として1~2ヶ月程の期間で実際に概念分析に取り組んでいる。本学の卒業研究においては、学生のレディネスに相応しい教育的配慮や教授方法の工夫を施したうえで、Rodgersの手法による概念分析が適用可能であることが確認できた。教育的効果として、概念分析に取り組むプロセスを通して、看護学研究者としての資源開発が可能であることも確認できた。概念分析のプロセスを通じて、抽象的思考力、質的分析力、論文を独自の視点で読むクリティック力など、研究者に必要な多様な能力をテクニクとして習得できると同時に、科学者としての倫理的基盤や哲学的基盤も醸成することが可能であった。このことは、基礎学力や志向性など学生の特性に拠るところが大きいと考えられるが、本学の医学部保健学科看護学専攻の学

生にはその素質があるといえる。

この度の概念分析には、文献を対象とする方法を採用したが、この他にも、文献検討とフィールドワーク（インタビューと観察）の組み合わせや、グループインタビューによる手法もある²⁾。また、テキストや教材として用いることができる洋書類もある。東北大学において、優れた看護学研究者の育成をめざした学部教育と大学院教育の連動を推進させるために、看護現象の意識化、概念化、理論化の学修および教授方法について検討を重ねていきたい。

引用文献

- 1) Rodgers, B.L.: Concept, analysis, and the development of nursing knowledge: the evolutionary cycle, *Journal of Advanced Nursing*, **14**, 330-335, 1989
- 2) Rodgers, B.L., Knafle, K.A.: *Concept Development in Nursing: Foundation, Techniques, and Application* (2nd ed.), W.B. Saunders Company, 2000
- 3) 2) 77頁~102頁 (Rodgers, B.L., : Chapter 6 Concept Analysis: As Evolutionary View)